# 夢想兵衛胡蝶物語前編

貳

# 夢想兵衛胡蝶物語巻之二

東都　曲亭馬琴戯編

## 色慾國上品

慾の色。いと大なるもの。國君なり。尊位を捧ぐるもの。隣國より削ぎとれ。息子ニ人が為より分上を称ふるもの。死ぬ。親族より挽き。とそそる。或ハ千両の角屋敷を。一夜の歓楽ふ賭潰せるもの。或ハ五十年の性命を。二十一期より情死をせんとも恨とせざるもの。大慾ハ慾より近き患ひあるも。遠き慮のなきゆゑ。志ハ生。そ一活るのみ。いづれの色を好ざる。妻恋ふ庵ハ笛より寄る。焼野の雉声。ふあるハ是。藪衣の縫目より隠る虱も。北を負て死ぬより。借家の屋根よりぐ描も。友と挑るく月夜より呻る。牝狗を追ふ向ふハ乱ぎそ

水をうけうる紙厭ひど燈燭ようの夏虫ぞ。惑闇ぞ火よ入るるをを悔ぬ」と。鬼の女房よ鬼神あり。割鍋よ閉蓋あり。矮雞の肉儀の大不器量。蚤虫の嚊衆のふろちゃ。慶ぬもさろうのまど。鰻の貝の片そひ。比目の魚の大湿ろ鮫河豚が悪女で鮪の味。阿漕が浦よひく鯛も。鯉で積ろそ濃汁よ烹ろくそひとおろめり。有情が殊さら非情でも。高砂の松の夫婦と現ぬ」。化野の露ぼの字と招くも。未が尾花の九十九髪俤世の果が小町ぞ。悟そるまぐ即色是空。ろんとく大食されば竟よ脾胃虚の患ひあり。瞳ーを死て荒淫るれば可惜女房を若後家はて比翼も像見の紋ところよ迷り。連理の枝も頭父ようろまて美人の骸骨あるる甲斐るり。化の弓が弯べくべ。化の馬が騎べくど。化の慌鳧で相撲をろろ。化の家ぬが指でもさるる。と國禁法度厳るるも。禁じがたいの道るる



よ。その色慾と強うろいろる國ぞあーんと。愛想丘の尚が紙鳶の上り。下界を遥ぬ直下ぜべ。その國国よ廣大あり。上品中品下品とろれぐて男女が十五六ろ。二十五の曉と二期とて男が十ろ衣紋を着ひ女ぬ三ろ小尻を拊。日髪日比粧日焼餅。いざござの往とぼ。勿論一本の伽羅の油が一度よろひ足ろど半日の洗湯が花をろる迎ひとうけ男も裙を踵でうこせ綿が落く入ぜて。物廚の網のごく。帯が廣くして。海老胴よ似ろり。されば上品領よ住む人が。家氣着屓。艱あり。男が東茅ろるもあり。水干よ烏子もあり。肴なーよ小刀はーるもあり。女が五衣よ緋ろ袴。或が襠よ下髪もあり。振袖の指ろ目よ。厚綿さげぞ。五月の茶玉ぐれ。ひろよひろつ也。両天の花挿頭が頭おもさろよ見ろ。嬉ーのといろてのあ歌とろうぞ悪ーいとろて辛を孫ぞ。ろんぞのそーあへさろり文句、そりや

咲えまねぞうよくでゐ斗と然ぞれバ疑ひえまてさ。ゆるそそもと忽
よのろくろく。癪嬉しとの中るゆり。萬つ手ねる処風俗みそちろとし
艶簡ゐ。蒋給ち匕の文絹よ。崩ゆる長級と。こくと結ひさげ。向練の
帽子よ。總模様の中年懶者ハやの字よ晒の足袋。塗骨の扇半啓いて。
胸のあろうをあおぎながら。よゆるろくとゐあむ跡ろ供ハお定りの。菖蒲皮よ
紺の着枝。ぞぞ折ろ某甲さ名。ゐめよりろれりの名ぶと捨ろふいよハ。
問ごとまゐまて意の使主をえまねよ取次の青侍と。このつもこけのありそる
目つ死ろり。凡その地の大将ハ結髪の臭方を嫌て。頃城よそりこと。脊仁男
の三徳ハ悉缺いれどゐろさむをりよ男ぶりよく。何ぶよるの身とりて。ろけ
の金よ手文章ゐ。佞人時をろく。家の宝物と贅よゐ色胸のろさふ老女
と紛ゐおりく国家を押領ぢんと計較むその好計ハをまぐのれどもりつも
ゆろろ女ゐハ目がるく。物侍るくゐ主君の奥方よ。ゐ似りゆ。美ハ若殿の。鼻
りのゞ毛迩くそろりさと。頃城をととろせんと。戎ハ黒上吉の腰えとろくく
むりくゞ死それど。相待の生ところの。とまりの色情を上品領でハれてん湯といし中
品領ぐんおそん婆とハ。まようて。中宿だりのりやそ麦く。紙雛のそ落
るゆふ。将衣烏帽子の手そ。十二重の上膸を脊ぐろ員くて。ゐりゐあり。
そのと死追人の兵と脊く。腹巻よ小手膸當くて。松明をろりつまあれ
逃るゆと呼びりく。落尾花を踏ちゞ死。をや近づくとろうて走ろ。ゐり
何ぞと人の関ひくと死と。頼戸物町の寒晒う。野さ匕まるうて業さ匕る。歌
ところてもあるまいふ。げろうとんらく捕らくもあろ。戎ハ野雪隠へ逃んぐ。
こゝハ異見でも生ゐねるを。焼殺さよと威さ迩く。むりく野ハふろろの母死そ若
草のつまもろれり。ゐまもろまろ。ゐのさゞ口雪隠ぢけるむさ

孫兵衛とこれど。尻が重くて従兵課長どもに未だ恋の名聞を好む方発女。ねえろ。忘れよう柴の。るだろうの。なげれせん。と孫兵衛とこのまま人よ咎そへ。格別の余情ろ。化る男と化よ契ろうて。捨よまく浅よそと浮気る男よそ膳しそ。だろと浮名のように。愛想づくをろべそ。そろくそれてまろろうで。その歌をその夫へおいて名誉をるもめりこまてい一首の歌あるよが生涯と飾りまるとろど。一夜ろのれの君とろつ。一心命と花務さる。男と同日の約こ。この上品領よ生るく女い顔そも世よ拐よ吉気嫉妬も世よ拐よれど。口穢くいいひも生さど日よ三度夜よ三度眼恚の煽を燃をと。天狗通ろ苦くろよいおまして。本妻と嫡妻の頭髻ぐ。仮楽くと隙よ蛇とるれば。夫もあれまくると恰まての景迹よ氣を呑まて。下の口よ高野へ登ろ。

一生行ひをまと。ありまた両全の姐己ろう家が乱まて。忠臣の讒言半城も聴入まど。怒のそべ杖手ろうとるのそんそをろうろう。痛手るのぬ家臣のまくこ。箕四郎い奴とろう。比干兵衛い胸を裂まて。その國亡びて忠臣の名をぞしるも迹の祭り。神も佛もえろうもべ。昔ろ仰ぬ故まと馴。妻い女房の気をろべ。女房い妻のおちろど。あべまよぬ中るまバ互ひよ妨ころの角つ彫あひ所を悪人つけんで。科もるれ藁人形よ四十八本の釘を打つけ庭の松蔭へ埋まべ。まて祝え出ど主殺あろ。是でいやねと一トせ薬。自ずよ馬との手ろうまくそれうと天窓と脳燭よそは。丑の時まおろと出ろけまバ八ろ鐘ごゥんくと鳴ろろ。樹この梢ごろ風のさろくと音ろで人あげもせぬ高足駄。向装束よ髪ろ乱そ。まぶ支度ろ甚手ろり。兎て入ろまよまのとろるふろひ。ろくく社内よ歩そろう夏向向氏買まふ。

ろのよ太いの枝と神木のおの樹を握ろうとするろう。並よそ〳〵松
ろそ因果生月へろの用捨る〳〵。五寸打とろろろん。葉を切り。芽を睁り。
ろろと幸防とろつよさ。秦の始皇ハ雨やぐり」と。松よ太夫の爵をこれまで
こまで又おまろ胴慾。夫杉のまとそ死と刎むと。死ハ直とそろすぶ。
生ろ樹るれがをだとのつよ。曲よそぐろ。打の。預ひがろろ。ろろ。
神ハ非礼と受と。人と呪ひ。完ふろある。女の猿智恵。翳家の一仏
ようや悪神が荷贈よそ。そと」奇特ハ人ろろ。めでくハ一期ろろえど。
そそもく人間ろど。ろろ別ろりのろのと草木よよそ亜集ま」三年
の古塊がめぐりくてその名よ報ひ未来永劫刀林地獄へ墮て苦む
ろのもあり。かろ国ろもまれくまで蓬よ支ろ麻のごく。妬をこか零ろりて夜
狩びよのろまろと死へのよ夫よ顔つ死ぜと孝ろあろ拉せと羽打をと
と落ろろ云ぜくさ〳〵生を小脱指草履ろのろまれてハ疵
ろつ足下合点ゆび。ろ服ろを。兼学の妻ハあま」と。焼餅やりぬ
女房ハろ。ぬつくと」て出てそりろ。おそろく鴨河の水ろり」と楽む
間夫がなくてハろりハね。さろであろ。こやろのまろあ約まぬとあく熊を
ろく小りぐろ」植根の隙ろろ窺へハ生ろろとろろろめ。新端ま近く
さて月よろぶ琴をろを伽みそ物さみしびよ琴ろ」と風ふろハふろろ
ろ〳〵彼。立田山。夜ろろや君がひろろくと。ろろ人を笑くハ兄ろうも
ろれぞ。かろハ妻を居物みてひろ物をろハせろ男冥利よろに
ろる之。嗚呼これるぐろ悦ろろと後悔そ。切丸を開れて走ろ入ろ。堤忽
ろそろべろる妻と勧解てそれろろ夜ろそびぞ。なぬめろ場て思愛ハ。
彼ろ一栄の生才智ろハ。加てもかつぐ歌も赤実情ろろ生ま」ハ工能ろ。

又その郷よ何がどの。これも同じく役者みそ。公操ら容をうとやふべのの本妻が。鼻よつくとそ妻ぐひ。壁を隔て彼隣花と。明ても暮ても離且ぬど。生てもけげよ本妻を。強顔さ且ど恨くもせど。郷坐敷ろ睦言を。咲てある幸防つるさ。折も秋の長き夜よ風がりてある庶の声。西よあくろて吹ゆる」ば。窓ぐ」ぬまくよ本妻の。咳くるも公憎く夫ハ妻の名を呼て西ハ秋そ妻よ象る。庶もつまらぬあの声を。吹てくいくぐ美しく。ぞひゆやつくみと同ば。本妻ハいくハせぞ。これもまつくるのてそ人ふ意ら見」。今こそ外よ声をのこそけと口吟ふられば夫ハ忽地感よ堪ぬくまそ残る妻よつまるる」ハられるぐう。天魔の所為ふくありけんとて。忽地傍室を追ひ出。りと本よまさるね浮気を止く。昔よかへらぬ睦」く夫婦共向整よふもあり。爰想兵衛ハらの景迹よ。ぞハぞも大息吻ん。国よ女の妬忌るれハ。百の拙を代掩よといふ。人の性の弄るるも慾ふ」ふ」ハ悪とるれど。物よ觸さく感激られて。元の善よかへるとる。太鼓も撥のあるがう。両里の難を支る船も。一家の内をまくぐ妻も只揖のそやぐろう。私を浮るも水。私を覆すも水。あふまそ河そひの柿の枝よ雪オ降」。ろれバ良女ハ家の宝美妻ハ身を救敵よひて。夫婦ハ人の大倫あく。天子諸侯もふろの妻るく。卷耳ハ固ろ后妃の徳関雎ハ楽んで淫さぐこいう。只後る兒が不孝る」バ。七去の罪ね子る兒ハ去る子ろ。といぐども賢ふて父母よ順ろる妻ハ去ぐこと」よ換るる妻とりて。妻を娶るも妻を養も。枕の塵を掃て房よ快楽をる為みふぐぐ子種をもろそ田地みく。入促さ」ね物る」バ。地面をひろく。りろても益る。ろろ爪その習俗みそ。縹致がよくて賢ハて。子のお教

妻が鼻よつくそく。女護の吟ろど女子をあつめ。淳せう。愼せう。辣せろう。そどせう。不養生が募ろくて命を擯喊さるる。只一本の蠟節よう速く。脾腎共ろ虚ーて義人共ろ仇とろる。井五の曉を一期とく。十万億土へ旅ろと死ハ義女も道つれ。おいるべ。妻子珠宝も禅へ結び葬ろんりてゆる」ど福の鄰家あハ禍あり。楽の地尻ハ哀ろろう。死生命よありとハいど不養生ろる」バ命を待ど灸くい死生もつれよあり。ろくろる」して病ひを惹生ー。病が重ての菜三味一夏ゆるよねゆる」ゆ字有と。禁好物の妻いよ幸防ぐハるく。此ぐろうハ大るゆるべと。醫者ゆるくーて毒をまくるる」ゆどまちぐくろるハる。医者ハ病ヤ愈さろぐろう。毒断さろるハ誰が為ぐや。り鬼のそで突さ行もろぐ月を可愛とろよろべ。醫者が訓ろ毒断のろるゆも。おろうさろるりのハ忌ひぐろよ醫者よりくーて毒断を破るハ。つぐ月を化人みりく。化人をとぶ月は。耳を寒ぐ鈴を盗むやうなりの。その菜ハ飲みくいの甘いの辛いの。胸が気海天樞をとえど。寅の日あハ十九をやど鬼腹龍股肺背と画ーて休業ーて灸治の暦ーう先へろ出ー。年日ど爭の。血忌ゆのとの。卯の日あハ。人のいのとさろるふ灸治よ忌ろ大死なまちぐび。良薬ろ口よ苦いりの由ろよ病を愈ー。直言ハ気よおるりのあるよ。月のろよろ灸ハとべ療治よ日を擇む惑ひハおとし年日といハ毎年その月の。つぐ生まさ日ニ當るを。誕生日とゆ。又器ーて年日ともいふるべーもるを子の年よ生まそ子の日を忌ハ。年と月を勘定よ入まぬ算盤ちがひみそとえともるのさのくおろて。病ゆよりや療治よ日を擇でも。病の發さめハ日を擇ねバ元日でも年日

ぜも。頻病頻死々〻くく居〻ま〻ど。もろ〻べ日を擇ぶとも。医をえ〻〻〻。時を忌ぐして毒を忌ま。病ひの發ぶぬとよも。雞牛の灸治るもばゝ。日ふも時ふもろく。斜紋るく。天ら〻晴てあてる月よ。艾をえ〻〻火を清く〻。關爪のちぐねやうよ点もろさるく。その日ハ酒飲ど。両三日ハ浴ぜど。七日が間房ゐ絶慎でこそ。雞生よるべけま」ゑみも癒ぜぬ。塩ぶら火の物斷てるぐ〻。灸奥よ酒をあく。美る端婦よ四気ぶえさられべ。背よ眼のるのを不足〻。ひ〻めを羨むころでハ。灸治せねよえるふ者もろ。夫婦楽ハ悪るのるる。雞生ハ善〻のるる。悪みハ進む。もろる日をえ〻まぶ。吾みハ進ざるゆゑよ日を擇む。その惑甚〻〻〻よ。

百よ七八十るる爺婆が。牽牛花の種を乾さあれ。亦来年も蔭でるの〻まゐ〻ふをろ〻ものが吟咲ひぞ。

## 第二

久〻ゆ〻聖ゆ。五十年六十年後の事。もまねでろ〻乱怒衰楽。ゴ玉の命が志ま」ねとく。手を叉ねく居そハ。一ヶ月もこうされぶ。家の命とゐるつもハ一足も淺まのと約げが。その日ち急用るまべこそ。朝よ道を守と死が夕よ死ともよゆ〻よと。聖人の寓よ〻ま」。禹が七年の河後よ三度も。民ゆとれと名ハまて。ゆゑよ。その徳令よ衰へぶ。禁結ハ後のるぬろ。

當塗志の死のそこ〻ろ番請酒池肉林のこ〻ろ。切えせそるゆるとろ。

飲や唄へや一寸先ハ闇の夜の犬の糞。ころぶ拍子ころんで跡の人あるも踏さうと思ふ程もなく簡単。その悪念よ滅びざ。況て女の性ハ僻めり。三界よりが家のく百年の苦楽を化人と習ハ。夫一人を雪月花と称てそのものゝ操を守一よ。雪だるまもころがすせど。一生夫よ倦まぬ心ある指をさゝるものと諺にもよみ。ハづ。て身をのち崩さゞ。假初にもさゝ出口利ど。足ら。ぬ夫よ孤陋て。そろ〳〵のものゝそ紙よく憐ぶを婦徳とゝ。年がよれば愚癡妻。姑よろぬ婦もろけ。ハ舅姑ゝ孝理いゝものと心得てそろ〳〵事ゑ。ハろ〳〵とて飲ぶも又幸ろのうへあり。ろ死と統ゐ血気剛一。老て女房ろ夫のろけ。ハ良人にむごひりのと心得そろ〳〵さそらぬハゞ。ゑ不ど援嫁のう易いものハな。富貴の家の妻ゐるりのゝ手鍋さげぬろりよ。人を使よいつへるよ。ゝて気骨のおゝ。ゑことあろともろれゝ過世ろ福ありて富貴の家の妻とろり。彼を過世の幸ろりて。化の婢妾とろるそのろれバ。胸の煽をうち滅して同病を相憐ゑ同憂を相ろぐ。彼も又身を恥さ。幸妻を敬ふべし。祇王が後ゝ佛ありとも。いづこう秋よあんで果べき。ろうべ妻ゝ床柱ゐく。妻を懸物の正。床柱の手擦ゑ傷どゑとろあり。これを援うるふゝ甚ゐるり。總物ゝ叢ゆの觀るれバ。ん飽ゑ。ん。ん。ん

おるりしをえまべ。色衰く鳩盤茶の如し。孰う觜盤茶を畏まざらんと舌をふるへーも道理至極外面如菩薩内心如夜叉とえもうしつも衆人の。瞞まうふもきこの道。されまうり易いが惹の劇畢竟い男の悪性。るのりの口ぐがれつまつを食物と易が女の水性。彼も彼うる小夜衣さるの低いも鬼や頬の。好多注文さど。人い美風より呂ムを。擇さべ。後の患るくん。縦十枚の擂盆をりつくりとも。一人で二ッの味噌い擂くまど。十條の毛捨うあれべとて。二本一度あいつんまど。二の倍よい箸を著ど。酒盃あい蓋をさど。盈まざ。戯ると曙くざる。色慾國こそうそまと。妄想兵衛い紙鳶のうくう。肩をいくと肘を張り。いいおるる小言い折うう。留寺南の匂ひ慶と並。忽地しろの下駄ま當てぞと笑ふ女の声二三十人だろうまやと呼ぶまべ。ふ何ぞぞと不審さふふくつく直下さべ今おそる殿造りおい十



増倍の奇麗壮観。金張付の大坐敷。掛ふくる翠簾を捲あげ。滴酒兼備の若武者一騎。ぞろーのまい袴の肌脱ぎ。ぐくん荒事の睚塗の高楯總滅金高麗縁の青席夢。凪る春の海のふく線ず張の梭障子い。晴る夏の山ま仰う。瑪瑙の打ーし。水晶の盆石禰の戸張綾の几帳ま。ふくふぶとい。ふろう。ふくてこの舘のおーとおぶーく。そも酒兼備の若武者一騎。ぞろーのまい袴の肌脱ぎ。ぐくん荒事の睚塗の高楯總滅金高麗縁の青席夢。凪る春の海のふく線ず張の梭障子い。晴る夏の山ま仰う。瑪瑙の打ーし。水晶の盆石禰の戸張綾の几帳ま。ふくふぶとい。ふろう。ふくてこの舘のおーとおぶーく。

そも酒兼備の若武者一騎。ぞろーのまい袴の肌脱ぎ。ぐくん荒事の睚塗の高楯總滅金高麗縁の青席夢。凪る春の海のふく線ず張の梭障子い。晴る夏の山ま仰う。瑪瑙の打ーし。水晶の盆石禰の戸張綾の几帳ま。ふくふぶとい。ふろう。ふくてこの舘のおーとおぶーく。

へと追まりまべ。ふる打まと。ふるるとよ。叢端うくて。皓腕あうふ。壹るぞうの空灶の。蘭奢らんち死條念るくい何どけりり。孺子の学ひうまくぐろうろるもあり。孫子が女兵大原の踞扶よ異るうぐぐれる貫妃やい小町やう。玉子い九ひ死硝子を倒よつくく玉簾へ隔くる八月を欺死翌年の黒髪柳の腰元直よ連くる屏風を。揃ふとふ死花ふ仰う。

寔ニ人間の欲念ニこそ極り。慈悲の仙宮へ外よりハと。忽地我を打ちろめじくこそ今ぞ小言ひよ爰ハ兵衛もさる凡夫の俤さ。延を流し眼をするし。鼻息あらくつろうえうきをそれ。佐ニ来ら欺く梶原の馬の鞭よりねぶるもの多鼻毛とろとろもよ紙鳶の糸用の延ると紙をよべ。彼若武者ハ血気よまりて。奮怒突哉叶そう。サアこい組んと大手をひろげ。二八なりの美婦人が襟上松んでうよそ二ハ歯を役んと前へひく。互よ曳ヤとこちら小俵黄嶺の襟ひねり離て左右へそうさり真仰向。そりやうまるねと爰ハ兵衛ハ紙鳶へひっうえこそ。小張の糸ニそ。忽然と尻前ハり。唖の雷ろうよ案内うよそうと下界へ落く腰の骨をそこくふ打ち。暫く気を失ひそいものゾ名の爰ニの境をろうそされど定紫褐ぎそ。三月比の杜鵑が若葉よ茶くしろ

ふてひろでよ息吹くこ。あうそを見ニハろひの外。美人の中へ落入ぞ。ふろうの玉ニ不感都。物を追ひ失ニさ林和靖もこれハぞハあるまいと。菊法こる小松原よ身をおろして立うろ居うろ。橋を渡る海紅の帆柱よ彷徨る。流ニろうの悲こそ。鳥屋よ着る鞍馬天狗羽衣取ろ。まて天人ハ。考こる今の男のこ紙鳶ハ飛ぞこ。爰ろうまの杖後悔その拾注でろうむ。久米の仙人が布を晒ニを女の脛の匂ひよ人憑ニて忽地よ通を失ひこ大俗凡夫よ。考こる向物ろのと用意ハ笑ろう面向るや人ハ木のそろう。竹の打具のこ。朝寛上人も。牙のそが寺ハるろろう。京極の御息所よ寛く玉の緒と珠数を。三諸の山よ逝垂のひし。大物主の大祢も。恋の辛懐ろう人ニ俤逝日百龍衣姫命ハ。匙を投るひし例もあろ。口ニど調宝る物ろく人

の返事を待ちぬ。釋迦も孔子も勝手よき方へ立流れてのびやかなる
その身ぶるひもせず炬燵丈夫にちゞこまりて紙帳の外とはなれ
少年團らゝと渡るやいなや小言八百並べ立る報ひふく。憂目を
こと欲と毘放と後よ舎る尻のごが身の臭さ狐もめく惜り。野中で
化さえと接伴よ。ゆゝ孫のさるの生ーそぐ。ぶさるゝーそをまぶハ
暮かゝる。肚餓くかゝる。宿を備へる。人気いる。物食ふ。も糧へぶ。
紙衾のうへよりく居さと死ハ。肚餓もかゝ。ねむくもおぞぐいつも
正月ぶやとぶんさ。三保の門松天人の立袁をこがみよさるもの上。
四睡もむー山水ふいろ。更よさまぶ里を見ねど松原で出さるれバ
入江あり。日卒でいろふるのぶ。天の橋立とも名づぐ。ぶ気ふ。緑波漲
と読人。鴎と驚り。向雲水よ映ぐ松倒よさり。向上ぐハ明月海

ろ昇り。直下ぜぶ漁舟巌よ歌り。潮風よ戦く芦の穂ハ。これを招く
うと疑よ。夕霧よりろ遠山ハ造化の墨絵ぐえろぶ。ゆろ住捨ん
小世を避る。呉一軒の柴の戸あり。り須磨の配所ろぶ海舶の
別荘ろんと。爰起ハ御いふ詠び。おのづろ足もさゆバ立坦う
走りう。生垣の手折戸を推ど敲ど開ぐをいぶろの声よものゃえ
元ハ落宝ぶる天竺浪人紙衾ふえるのて難儀至極一夜の宿ごと
貸てーぐと言ふるせんで呼門ども。軒の熟柿の点ぢろうもんぐ
遺もてぐとも。一言の返答のけまぐ。ろのふいふぐぎろろぐり明店ぐ
ろろろと垣の破まろさー取けば熟田へるぶれろく揚貴妃う嚴鳴
の弁財天教。ところぐ美女よ琴ぐ弾ーてあり。ぐりさろふ人のふ
ろぐび。れこめぐ楽ぐろる。ろが物が母の姫ーさ。亭主ハ定めく玄宗帝欺

俄一平清盛欲り男がごとくて年ころ在吉中將。光源氏
ゐもをさく劣らぬ上ろうのでゐくてゐ補ど。そちむねく雨ゲ入ふん
とふれを忘るゝ。ふう言。枳殻の刺で額や項を撥ゆふくるゐ忍ぶ。
ぞうゐかうゐ。垣の破まめく首をとそ。ほくぐとんまびふいうる亭
主ハおろびし白髪阿爺ゐまハそびやと二度びうりうる二欲心圀
おゐろくの切おろしの紅裏へ刺衣の表つけとおろびうゐさそもつり合
ぬ夫婦ろの。小腹のまゐ呼けび翁ハ表を佶とふくおゐ不審ひ。今
吾妹子が彈琴の調子忽地濁りへハウ。と又一ト忍案ゐとれ
不審の中ゐ窺ゐ辭者おろん。誰をふく糸まと仰ゐ従ハ勞
禿の女の童ゞ舅のろ袖二人ばま。駒下馱ろくく切戸ゐ閉く爰想
兵閤が袖をしにさモろめてへぞんぜぬ油魚とりゐのへふん竈ろ

生とゐハ。生垣ゐろくりのさろる。それどふくへ内へろろて。孔雀
とふのび茶をおれ。サアごん甘とふまふ爰赴兵閤ハ痛へふる。
首をねふとそれびあゐ悲しや。枳殻の刺でめりくあのてなどゐは
へれび帯の結び目ろく。ゐふろ痛さ苦しさなふろうの垣
とりふ。おく行倦法ハるへ欲まず待ゐへと賭絡てもろど。情をろぬ
女の児とも。弱腰下とゐふまハ。傭のぬるく一旦ふまろ。オーも露ろ雨
あびり。こひつ悲びつ悲びつ懐つ。膝のあろよ踏揚の泥の友つ汚さつ起
あびりの。ふへあそゐろくと従ろ項ハ蚯蚓腫。赦免ふ偏ろ俊寛が。
壁沂ふるろく。女の童の迹ゐ眼そ。縁端ふ暗ゐ暗へ主の荊棘余ふ
ろう笑ふいろ爰赴兵閤。それを誰とろろんでや又忘ゐ欲と云
ろく声ハ咬ふゐじやと引を摺つぐくと又ふへ本牧の。私の中で假寐

まつこと能。枕上よよと泣ける。浦嶋太郎よす分ちがたき。おろかべき女の人間ならねば蓬莱仙女。こよひつくろと勝ぬうう。打そかろ一封面。面目もある仕合と。それ〳〵こを敬まま。浦嶋かちうくこと。爰起兵湯を招ようで。玻璃の四よ堆高く鶯うる。併も果子中の名もあまぬ青い物と食へと賞へ。おろかはそれ〳〵御意かよう。一つ食へばよや腹よ満て忽地それよりし。が疑ひるるまで。持病の理屈がひくて且くロをもぐ〳〵もが。堪ねてあぐる対ひ疑ふかふかは例れども。某謙て。日本紀あそ雄略紀よ人民浦嶋が子の条老くまで日本後紀巻の十七。淳和紀をそて此よ居ハ雄略天皇の二十二年秋七月。蓬莱宮よ到る。三百四十七年の長遠留淳和天皇の天長二年冬十二月。丹後の水江よ立ち。玉手箱を開ひて忽地

皓皓白髪の人と変じ。ふ〳〵と死ぬ。よいとこそ〳〵も人ぐ〳〵と記されこの外の古書。万葉集。扶桑略記。童蒙抄などに人も同じ赴なるよ。かく悉くそうそうる。り幽霊などありやといはせも丈ど冷笑ひ。それらでその一をそうそ。その二をそうぬ不穿鑿。釋日本紀よ丹後風土紀をいふ。伊よ部鳥養與謝辟司。文を作りて與子の風土紀ハ勿論。その浦嶋子傳といふる此記りとえれと。丹後風土紀ハ勿論。その浦嶋子傳といふりの今ハ亡びて伝へねば世の人。呉日本紀日本後紀よ據て疑念をおの子。悦惚とそ日を弥り浸よ形を煉。神を顕ひ巌阿よ起こりのあんが。彼浦嶋子傳ようそ國史よも收めよ。ふるうえ贖浦嶋子傳とふ古書よも。三百餘年の後水江よ出しうを記して浦嶋が子。悦惚とそ日を弥り浸よ形を煉。神を顕ひ巌阿よ捜息ーそ。終の亟ぬそうぐとあよ」ハ。仙人よるうる悦ふ證据そく

書を博く覧ねば一生疑ひ解ぬものなり。
経史を渉ぼて雑書を捜索ば。動もすれば故
障りのみ多し」小し学べし方よ大ひに悟り
ろう惑ふまじきや。その俗眼よてらんとそ。嗚呼年よ不足
もるものよおそろしきものよ。美女を左右に。琴碁を友とする人。談笑の
年老の冷水身にあるんでるんとよ。今それのろくりの人。眸を凝て迷
る。ところよさげもんで居そあらんが。年ふると大病人が女子の奴抱で
るけ通べれとうぞうや千万人の美女が眼前よ充満ても。ろくじる
動さねば流る水よもあらじ。告子がいふその心を動さず。孟子も亦四十ま
て心を動さずといふ。是女を見て。財宝を見て。心が動をすいところのべろ
しが然と拉ぎ。和をもる人夫べし。ろくでなしべ。不義の富とんく
も。これを羨ふそ。その當よ媚諛ひ化の妻子を見てもその美を欲んで。
袖褄とりさ方も徳もるく人の頸よさんと欲ふ利を争ふて好を
破り。親族を貶て他人を愛し。貧賤を侮て威勢よ着ふさざつ
くべや。他の妻よ私をるものが為損じろう。身の破滅ぞといふと。
きろざるみへあらば。悠々ば狐が油断を見て弥ある欲膓り魚が蚯蚓を
見て。狗ある玉欲もろのぐら。慾を拉ぐ玉ぶるろ。おろくろべ弥
見て。狗ある玉欲もろのぐら。慾を拉ぐ玉ぶるろ。おろくろべ弥
ふもかろへせもん。狗をも呑んとぶ慾よ倒ると危ふ欲忘る友よ明日
八獣店の餐よつるる。魚屋の俎板よのぼるぞ。一時の利よ走て千載
の名を汚し。六の慾を恣ふて百年の命を隕ろ。この点よ君子の禍
とする玉へ。小人こを福とす。君子の憎む玉へ。小人こを好む。こを好む者
へ塗炭に陥ちぐ女子を見ても。木石が動くかぬりくりつ顔をんとて大

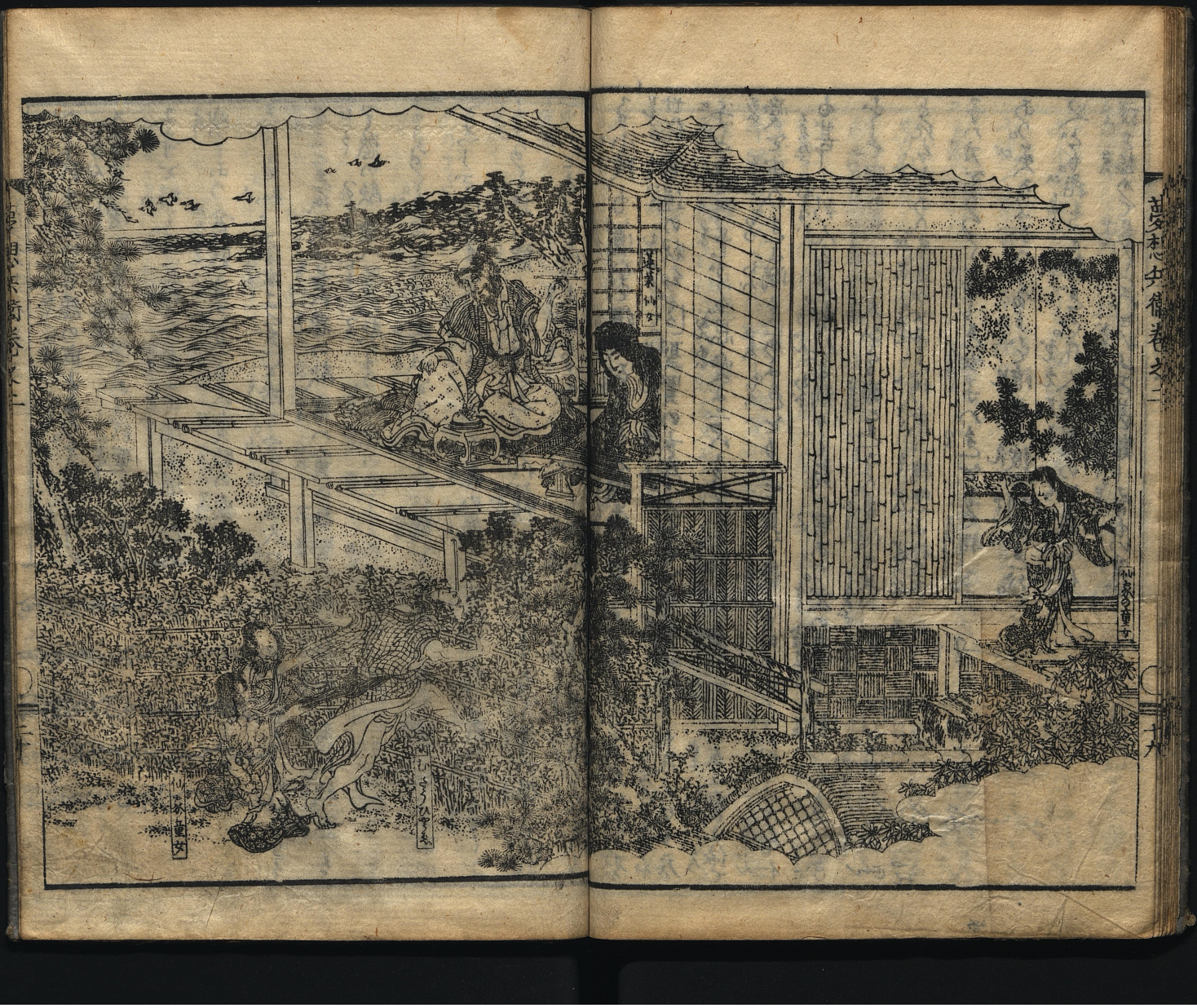
の糞のある。を忘れるものあり。彼ハ何地の女子ぞや。これ迄をもつてハ。彼もこれを東へ運るゆへんと彼を西へ往をこれハ東へ運るゆへんその臀の間あるを好そ糸の様なる紙もつてこれを包み。その雪隠を犬の糞を塗らん。圏へ嗽えで五父の損を致し。甚しきに至てハ。小石へ鉄てあの一つの足の爪を砕するの父母の遺躰を毀り傷りて。不孝不義の罪を招祝ま。ご禍こと速るべし。鄙よりぬ名もそよぬ女子どもの花軍をえらく。俗を流し。紙鳶の尻が尾くど忽地後へ腰の骨を痛か。紙鳶を失ひく。進退こゝ極りしも。彼塗ゆく女子の顔をつんとく。犬の糞を踏つけ。その爪を剥をもの笑しく。損こりくで恥を被るぞよ多く行てるべれ。これ仙術をもつて頂日うちぬ。が理屈いふをやくる子ども。でハのけ。そ。ゐるよ多が約まねば岡眼八目他の尻ハ臭く。己が尻へ臭く。

ゐ。諸ろ〳〵の盗の共ろ。誉六、七ゐろの噂もろのゐんそく息子友ぢもと嗤呪ゝ悪口尽ゝ親仁が次ゐて我人で出るぜんそくと中よくねがね。向後ゐ悪口つゐ。悪口つゝと。まゐまのまゐくぞ。ゐのさゐつゝし野郎ゑゝと叱る。ゐるものゐく。悪口つゐゝと訓る親が悪ゐつて叱ゐ叱る鉄訓るのゐ入我家へ入ぐゑゝとゐゐべ。ぬぶ少年園でいさぶるゐんなものみそ物ゐ入ろくちひりといふゐが肝要。四角よりハ惻隠のゐろをゝ世ゝ子をりね人が他の子どもの不行義をえてゐみがゝ〳〵ぐ。狆の瘟がおまんうぐも直な人ゐるまのゝ大切ぶおせるゐ小言ゐありそれハ子をりね人のゐ簡みそ子をゐ王狆よゐべ。四十五十よゐつく。離ひそゝ。五人七人子をりて一家の締くりをるゐどのりのかゞぐりのゝ紙ゐゐぐんや。紛つゐるの約ひが死ハ衣食の足ぬと世ゐろゐ暇のゐのあぐろ。人生まく。三年よゝて物のひるゐひ。七年みそろく

憑委する所以。物の人中より貴てべるの。ある友より日本に生る人は訓ざるとも千が一彼で言を以ば異邦より生る人は訓されども馬牛でおとあけうさるふるて富貴の家より生るあり。物のひざまも賤しくべく貧賤の家より生るものは物いひざまもいと賤しく。我ら育閣が性とるるまべきまく訓くもあるものとて孟母そびく店がえをいされるそ。子よりは外生もまを。内で捨ざる紙第一よろけまべ。まろ近所へ出るけても友がないやうにあるろうく。自我と内より尻の居るとの卵養の鳥の絆を生ぬよもるの。かろ手段をあるのぐ。抑人と曲突のお紀おをうそえまべ僅三里於四里の席を萬あり。敷き我住居る紀をえをこ乃へもがそくべ孝行る子をもつて人よ愛を重びまを溺るあるまをもつて身を喪へものもあり。さればとそ智仁も甚しく紀んよて智仁は溺るとも死ん害あり。宋の裏公が歎の不意で襲ぐて戦の兵士を夫ひる類とまるの義信より甚しく紀んとて義信は溺るとも死ん害あり。尾生が女子と約束し橋樂より抱着そ死る類をろう。夫男子は才をもつく挙まを女子はまをもつて擇る。もろんでも才あるものは好気あり。美る女はるのよで溢るの。彼より利あまべ。そる害あり。鸚鵡よくものべ。我をを離まべ。凡人聖賢の口ねをれべも。愚癡と離まべ。それを説を極めて易くこれを紀んと甚難しこもいまべ論べ



る小銭も遺なべ酒飲べ。この金を眼落おべるはばよべとその外を欲りねべ。世俗普通の親幻べろ聖賢の女房よりも可愛がるも。凡人の女房子どもで可愛がるも。恩愛より二つはるけまべ。凡人は愛より溺るる友より愛より依て愛を重びまより溺るあるまをもつて身を喪へものもあり。さればとそ智仁も甚しく紀んよて智仁は溺るとも死ん害あり。宋の裏公が歎の不意で襲ぐて戦の兵士を夫ひる類とまるの義信より甚しく紀んとて義信は溺るとも死ん害あり。尾生が女子と約束し橋樂より抱着そ死る類をろう。夫男子は才をもつく挙まを女子はまをもつて擇る。もろんでも才あるものは好気あり。美る女はるのよで溢るの。彼より利あまべ。そる害あり。鸚鵡よくものべ。我をを離まべ。凡人聖賢の口ねをれべも。愚癡と離まべ。それを説を極めて易くこれを紀んと甚難しこもいまべ論べ



べうべう。生死の吉悪の成よろづ。その人死して後。たゞめで識者の衷評定る。妄言ハ徳を蓋ふ所以よべう。聖人ハ黙してこれを斥。凡人ハ耳を貴ぶ有よ。寺を好む間を賤しむ有よ世情よ通ずべう。富貴の人ハものべう富貴乃楽をあり。貧賤るるりのも又貧賤の楽をあり。貧賤の人富貴の楽をもとべう。おろかなる有よ之を誡る。富貴の人ハ貧賤の楽をもとべう。おろかなる有よ之を笑よ吉ハ悪の敵。富ハ貧の敵賢ハ侍の敵智ハ愚の敵慾を学慾の敵。廉ハ厚の敵うう。設悪の悪よる所以をもとべうこと。を懲うをまようべう。貪の貪よる所以をもとべうべう騎を者よりべう。侫の侫よる所以をもとべうべう。愚の愚よる所以をもとべうべう教導べうをもとべうべう之を退るようなく。愚の愚よる所以をもとべうべう。慾の慾よる所以をもとべうべう。情を禁るようべう。厚の厚よられ所以をもとべうべう。志をもとよはひて異物ハその害を責害うるとを置て責ど。直ぐをあげてりべう。の曲よるを措とれハ曲よるりのもありべう。羞て直ちよ著ざる正ちろれども。山之態卿のごれハ星よ牽牛織女のりまこと夜這星あり。雲よ雨雲あり。神よ山の神。もとの神。ゆよ神あり。佛よ大好仏あり。獣よりもやう貌あり。猜ろもく犬あり。鳥よりけべるあり。魚よろ鮪あり。虫よせんびう虫あり。ろろそれ蛇あり。魚よろ鯉。あよ紅。ろろ鯉。ろろ鮭。ろろ鯉。ろろ鮭。大湿鍋。黛女郎貝評判乃鮹あり。本よ連理あり。大ろ木。いとら推あり。草よ比翼草飯よう好草あり。で。一國三郎の人倫。禽獣草木よ至まで。ろよ慾を逸あーろろく顎國風るれば。不教嶋よ異ろべで直ちよ挙んやうもあるべべ。それ生賢人顔ちるあぬーよ今僅よ二三十人の義女をよそ。芝地よやろびべ。神通不側の糸よちるれて悪の奴のこと紙ぐるとのりね現てこの関る生ーりの執

ゑ。慾の害をもろくさ。死ハものゝおそるゝ所ゑどもゑ」よ瀾ゑ」情死しやく恨とぜるものあり。富ハ人の慾ゑる所ゑ」どもゑ」を好ゑ富を捨て貧を辞せざるものあり。人ゑ」をえゑべ愚ゑりとそ。その分ゑわいそ賢なるべし。この故ゑ鹿を逐ゑ撩師ハ山をえざ。ゑ」その公康ゑあり。山うあくざれバゑり。ゑ」をこのむものゑ」よ阿。男女相歓ぶが為ゑ。その害をえゝざ。食とゑ」とハ天性ゑり。教ざれどもゑ」をゑる。その害をゑゝてものわ慾ゑるの。こゝをかく。百年の夫婦ハあゑ」どもゑ。一生つゑ」そふ情人ハゑ」とやべゑれハ夫人をゑゑ」髑髏をえゑべく。艶曲をゑゑ」風の耳よるゑべこゝ。ゑ」ゑ」そ慾國よゑりとくゞも。ゑゑの界よ美ゑるべゑ。世よ貧泉を飲ものハ貪る心起ゑといふ。そゝれども呉隠之ハこれを飲でまよく廉ゑり。志をえゑるものハ誰もやくこゝをあくべん。さんべゑ」ゑれも亦一度ハ迷ゑ」ゑ呉の切名。葦葉

仙女が色ゑ」変で三百四十七年の春秋をゑゝよ。故郷よゑゑ」が親兄ハいふまでもゑゑく。家もゑり什ゑ」ハ里も変じそ。東をえゑそ西をえくも。ゑるゑゝぬ人だゑり。せんえゑつゐて玉手箱を開て一度よゑる年が。茶イゑのゑて慾の害ある二ゑ。ゑて悟り。妓を嫌り慾を断。仙人ふゑりまゑゝハ。鉄結でも糸紙動ざゞ。おぬも老ゑ。賢げよ理屈いふゑゑ。ゑぶ者をつめて人の痛ゑ。ろひやゑね岡掌須。世よ大人ゑの息子や娘ゑ。世間の誉ものよゑれゑるも。三四十よゑゑく愚よゑり。男ハ拉女抱ひゞ。親よ兄ゑ」と別代を分散ゞ。女房子どもよ乞食ゑ。女ハ父母のうゞつけそゝれゑ。律義で稼ぐ夫を捨く。逃ゑゝれ世の胡慮とゑるものあり。それゑハえゞめ賢くて陵よ愚よゑゑゑゝ。ゑゑんゑゑの味ひを。ゑゝねゑちハ人をも笑つぶ。不図ゑゑゑゑ味をおぼえ。それぞ甘い

りの外。今まで食るんざいろん田別。人間僅五十年。こと式の楽こそ。
甘ざいでるのでろん。一度食ひ二度あそび。三度四度と
度こそのり。身の破滅ぞるとよ。さてあてるの後こそ狼狽
まろう。ろのこの外そのけさと後悔そろ迫ろぞや。河豚の毒の
あるのと。おじて食ぬのも。人の食ふを見ておくのもせこそれ程
高味のある魚をんてあるこそと笑まて。あてえ喰うとこそこそよ。一箸
食こそえのいろまだ。それこそ河豚が好まるって。ごろごろ。河豚
よ命をそ々と。彼ろんこの味をろこざし人が四十を越て淫気まろう。
身上を分散こそと。おすてこそ。人のおねのこして見識のろんこそいろ
ふろうても由断いるこべ。おれがおぬが之歳こそも之。然國の味ひざこれまそ
おこねんふこそなであろう女子嬢ひと。いふのでさこく。この道理を悟よなべ。

上品領の景迹をえて。腰ろぬこまろみこそろんの。中品下品をえろろ
べ。そも命いつくまの。苦中の苦を喫る人を。人のうの人こそ。
と悟の道途こそ。えこまつけ。ろを警め。人を警め。情を
禁め。慾を拉ぐこそ。工夫さべ。捨る紙鳶あるこが。助る風あり。中品下
品へあれよう。ろる陸地るれば到る易し。強飲貪婪の二國へいれ又
船をりて送ろりろん。凡そ四の國を極て後。そのめて五十年の非を
ろこべぬこべ不必要の祐あって煩脳哀傷。食言。飲楽の四の郷へ。
赴んと容易かべ。あんとろひ。名よ。これこそ化現こそ。
をろこえ。こころさ。そこと。そこ。夢想兵衛ハ一旦山どこあい
あんとなろこ。痿痺をして立あがれば又うの二人の女の童がさあむべ
甘と送り出こそ。切戸をひろまり。ろまべ。夢想兵衛ハ忙然と夢う

着るところにて。本の間を立出水そひのくと二三町みくだりぬれば。今までありつる草の庵のまさごあらくなりて。もくとも思ふともおぼえぬ。慈園の中郎。中品領へ著よけり。

○總評

男女の非礼を野合といふ。この右よ。要るふ心まつ媒をもとめて。男女の礼節を淫奔とそしるのみ。良女ハ二夫を嗤ひ。貞を好で待をまもらざれハ夫婦別るゝ。貞を好で乱るゝものハ妻妻と汚さる。礼節そのハとれハ妻子よく合ゝ。詩よいはずや。琴瑟を鼓がごとく。和楽して且楽む。その楽これを楽むと。真の楽ゝといふ。めでたきを好むとも可ならん。

夢想兵衛胡蝶物語巻之二終